ホールに響く歌声 音楽の素

昨年12月に「中大混声有志特別 演奏会」

音楽研究会混声合唱団

鈴木瑠璃、姜雪瑩、近藤樹、伊藤竜輝

晴らしさを伝えたい

2020年は激動の年となった。コロナ禍により、私たちを取り巻く環境が大きく変化し、当たり前だったことが当たり前でなくなった。大学での授業がオンラインとなり、友人と外に出かけることすらはばかられた。そして、中大混声としてのサークル活動も大きく制限された。対面での練習ができず、多くのイベントが中止を余儀なくされていく。

そのような社会情勢の中、本当に演奏会を開くことができるのかと正直疑っていたときもあった。それでも、私たちには逆境の中でも音楽の素晴らしさを伝えたい、そのために演奏会を開きたいという思いがあった。

たくさんの「初めて」との出会い

その思いに多くの方が応えてくださり、たくさんの支えをいただけたおかげで、昨年12月19日、「中大混声有志特別演奏会」が府中の森芸術劇場どりーむホール（東京都府中市）で開演した。

開催にあたって、たくさんの「初めて」と出会うことができた。初めて当団のOB、OGの方々と一緒に演奏会を開催した。初めてオーケストラ付きで演奏した。なにより初めてモーツァルト「ミサ曲ハ短調」という大曲を演奏することができたのである。ほぼクラシック音楽に触れてこなかった団員も多いなかで、演奏会であのモーツァルトを歌うなんて夢のようだった。

OB、OGの情熱が支えに

演奏会において、欠かすことができなかったのがOB、OGの方々の協力である。OB、OGの方々は全員が音楽への情熱を胸に秘めており、困難な状況を乗り越え、演奏会を実現させようという気概をひしひしと感じた。

その熱い思いに私たちはとても勇気づけられ、支えになっていたのだと強く感じている。そして無事、本番も終演を迎えることができた。感染症への万全の対策を講じ、来場してくださったお客さまのご了承を得たうえで、ほぼ1年ぶりにマスクを外して「キリエ」（「主よ」の意味）の最初の音を出した。そのとき、私たちの歌声とオーケストラの音が融合し、ホールいっぱいに響く音楽を肌身で感じたのを覚えている。

その瞬間、私たちのこの1年間の思い出が走馬灯のように流れてきた。大変な状況の中で、演奏会に関わってくださった全ての方々に感謝の気持ちが伝わるように願いながら演奏した。

全ての曲を歌い切った瞬間の、あの達成感と高揚感は今でも鮮明に思い出すことができる。そのせいか、舞台上で演奏していたときのことは少々うろ覚えだ。ただ、みんなと一緒に歌うときに感じた、止めることのできないわき立つ心だけは一生、忘れられないだろう。

音楽の「試練」に立ち向かう

今回のようなモーツァルトの大曲は、大学コーラスでもなかなか演奏曲として扱っていない。そういう意味で、中大混声は本格的なクラシックに関わる機会や「試練」を与えてくれる合唱団だと、演奏会を通して改めて感じた。この長い曲をどうやって完成させるかということが、一番の試練に感じられた。

指揮者やボイストレーナーの先生の指導には毎回感服していた。ご指導の通りに歌うと、声や音楽

本番に向けてリハーサルにも熱が入った▲

記事を執筆した畦浦隼人さん、鈴木瑠璃さん、姜雪瑩さん、近藤樹さん、伊藤竜輝さん（左から）▲

がより洗練されていくのが実感できるからだ。それを存分に吸収し、音楽の繰り出す「試練」に立ち向かうことが中大混声における最も貴重な経験となるのだろう、と最近は感じている。音楽はわれわれの語彙以上のエネルギーを秘めているからだ。

うれしいことも辛いこともたくさんあったが、開催できたことは本当に素晴らしいことだと思っている。2020年を通して、何の制約もなく歌えることがどれほど幸せなことだったのかを痛感した。先々の社会情勢はまだ不透明だが、2021年はできる限りのことをやっていく年にしようと考えている。そして、いつか近い将来、誰にはばかることなく合唱できるようになることを切に願っている。

プロのソリスト、オーケストラと共演 宗教合唱曲が中心の演奏活動

音楽研究会混声合唱団

1951年創部。中央大学最大の公認組織である学友会文化連盟音楽研究会に所属。国内外の第一線で活躍する指導者のもと、J.S.バッハの『ロ短調ミサ』やヘンデルの『メサイア』をはじめとする宗教合唱曲を中心とした演奏活動に取り組む。演奏会にあたっては、プロのソリストやオーケストラとの共演を毎回行っており、春と夏に行う合宿ではソロステージやアンサンブル、オペラ等で個々の能力向上も図っている。

「歌で勇気や希望を与えたい」 混声合唱団 広報部署長　畦浦隼人

混声合唱団の３年生は「執行部」のメンバーとして部活動の運営を統括する役割を担う。団員の減少もあり、私は２、３年生と続けて広報部署長として、団の活動を知ってもらうための広報活動や演奏会の集客の仕事を統括して活動した。

コロナ禍の集客に悩む

混声合唱団は今年で創部70年の伝統があり、毎年の演奏会にお越しいただける方々が大勢いる。２年生のときは、会場の客席の8割以上のご来場をいただき、自信となる演奏会だった。この経験から、今年は広報部署の組織としての運営という面では余裕を持って動かせた。一方で集客は伸び悩んだ。理由はもちろん新型コロナウイルスの感染拡大である。

コロナ禍にあって、実際に合唱の場でクラスターが発生していたこと、演奏会を開いた昨年12月は第３波の最中だったこと、客席にご高齢の方もいることという状況で、従来のような対外的な集客は難しい。団員を通じて、知人や友人に集客をお願いする方法(「内チケ」と呼んでいる)で活動した。ただ、ここ数年は内チケでの集客が弱いことが課題だった。

演奏会まで２週間という段階でも、集客はほとんど見込めず、私は焦っていた。団員らに「集客してほしい」とどのように伝えるか、そもそもこの状況で「演奏会に来てほしい」と本当に伝えるべきかどうかも迷っていた。

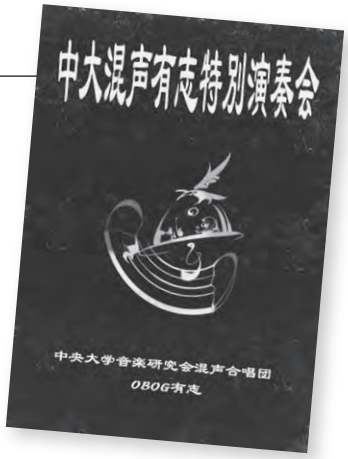
ホールに響き渡る拍手に感激

転機は共演したOGの方や指揮者の飯坂純先生に、集客の現状や自分が悩んでいることを相談したことだった。「演奏会をやると決めた以上、それに向かってやるしかない」と言葉をかけられた。正直、そう言われたときは「それはそうなんだけど…」と思った。しかし、帰宅して改めて、自分がなぜ演奏会のステージに立つと決めたかを考えた。

自分の中の答えは、「こんな状況だからこそ少しでも多くの人に自分たちの歌で勇気や希望を持って欲しい」ということだった。その翌日から演奏会の当日まで、そのことを団員に伝えた。共演者の方々にも伝えて集客の協力を頼んだ。

当日の来場者数は決して多くはなかった。しかし、目の前のお客さまの真剣に音楽に聴き入る姿と、演奏会が終わってホール中に響き渡った“光”のような拍手を忘れることはないだろう。このような社会情勢だからこそ、自分たちが本当に伝えたいものを届けられたと確信した演奏会だった。

中大混声有志特別演奏会



【日　時】2020年12月19日（土）午後２時開演
【会　場】府中の森芸術劇場どりーむホール（東京都府中市）
【入場料】全席指定席3000円
【演　目】
第１部　・W.A.Mozart「Dixit et Magnificat」(主は言われた／マニフィカート)
・W.A.Mozart「Misericordias Domini」(主の御憐みを)
・J.Haydn「Te Deum」(マリア・テレジアのためのテ・デウム)
第２部　・W.A.Mozart「Missa c-moll」(ミサ曲ハ短調)

指　　揮：飯坂純
ソ プ ラ ノ：坂井美登里
メッゾソプラノ：岩﨑愛
テ ノ ー ル：駿河大人
バ リ ト ン：増原英也
管　弦　楽：アレクテ室内管弦楽団
合　　唱：中央大学音楽研究会混声合唱団
OB、OG有志

中大混声有志特別演奏会 現役（開催当時）メンバー

パート	名前	学部・学年	
ソプラノ	小谷　凜	法4	2020年パートリーダー
ソプラノ	姜　雪瑩	法2	
アルト	江口　美遥	法3	2020年パートリーダー
アルト	厳　密爾	法2	
アルト	鈴木　瑠璃	文2	
テノール	菱川　哲雄	経済4	
テノール	畦浦　隼人	総合政策3	
テノール	新美　拓和	法3	
テノール	天藤　友喜	法2	
テノール	伊藤　竜輝	法2	2020年パートリーダー
バス	畑野　嵩人	経済4	
バス	宮田　開斗	法3	2020年パートリーダー
バス	井上　拓弥	経済2	
バス	近藤　樹	法2	

（学年は2020年度）

「良い雰囲気」チームを勝利に導く

決勝のレース後、クルーで記念撮影。（写真左から）永井嵩士、仲川耕平、星逸人、小野祐樹、中曽根祐太の各選手（ボート部提供）

ボート部
男子舵手付きフォアでインカレ制覇

舵手付きフォア

ボート競技には、漕手一人ひとりが比較的大きなオール1本を持って漕ぐ「スウィープ」、漕手1人が比較的小さなオール2本を持って漕ぐ「スカル」の2種目がある。舵手付きフォアはスウィープ種目で、コックス（舵手）と漕手4人が乗って競う。

「中大スポーツ」新聞部記者　小林美久（法2）

コックスのラストスパートのコールに応え、力を振り絞る漕手たち（ボート部提供）▲

第47回全日本大学選手権大会（インカレ、2020年10月25日、埼玉・戸田ボートコース）で、ボート部が男子舵手付きフォアで見事に優勝を果たした。

「クルーの雰囲気が良かった」。レース後、選手全員が口をそろえた。クルーとは1つのボートに乗る選手たちのこと。4艇で争った決勝は、スタートダッシュに成功すると、一気に2位以下と差を広げた。途中の1000メートル付近で、2位の早稲田大に詰められたが、「隣にいるなくらいの感じで、そんなに気にはならなかった」（永井嵩士選手＝理工3）と、選手たちに焦りは全くなかった。

コックスの指示 見事に応えた漕手

「シェアはした」。ラストの500メートルで、コックス（舵手）の星逸人選手（法4）がラストスパートを意味するコール（指示）を漕手に送る。漕手もそのコールに応え、一気に2位との差を広げてゴールした。

コックスは、オールを持たず、最短距離の舵取りや、漕手がバランスよく漕げるような指示、ペース配分を考えた指示を出すことが重要な役割だ。星選手は「自分がどれくらい、皆にいい影響を与えられているか分からない」と謙遜。コックス特有の難しさがあるという。一方で、レース前に事前に打ち合わせたことや決め事がしっかりと実行できたときに醍醐味を感じるという。

漕手の一人、仲川耕平選手（商3）は「中盤や終盤で、（極限まで体力、気力を消耗して）だんだん意識が薄くなってくると、コックスの掛け声が大事になってくる」と話す。

徹底した話し合いで 課題や方向性探る

インカレの約2週間前に行われた第98回全日本選手権大会は、準決勝で4着となり決勝進出を逃した。クルー5人でレースを振り返り、

課題や方向性を話し合った。

「インカレ前の限られた時間の中で、全員で（勝負を分ける）ポイントを明確にした」（仲川選手）、「課題の後半をどう伸ばしていくかが重要だったので、そこを意識して練習した」（中曽根祐太選手＝商４）と、課題やポイントを絞り、練習ではその強化に徹した。

思っていることを言い合い、「全員が同じレースのイメージを作れた」（永井選手）、「話し合いで濃い時間を過ごせた」（小野祐樹選手＝理工３）。冒頭の「良い雰囲気」はこうして培われた。わずかな期間で課題を修正し、優勝をたぐり寄せた。

エイト優勝へ メンバー争いは熾烈

今回の優勝に慢心するクルーはいない。彼らが目指すのはエイトでの優勝だからだ。

８人で漕ぎ、水上の2000メートルをボート競技全種目の中で最速の５分50秒台で走破する。８人の漕手が左右４本、計８本のオールの動きを合わせ、その８人をコックスがまとめる。９人の息が合い、一糸乱れぬ動きで水上を疾走するダイナミックな姿は、実に美しい。「ボート競技の華」と呼ばれるゆえんだ。

「チーム内でも切磋琢磨（せっさたくま）して、チームとして一段も二段も強くなって、ほかの大学を圧倒したい」（永井選手）。エイトのメンバー争いは熾烈（しれつ）だが、それを勝ち抜いた先にはエイトのビクトリーロードが待っているだろう。

▲賞状とトロフィーを手に笑顔を見せるクルー
（写真はともにボート部提供）

全日本大学選手権大会　男子舵手付きフォア決勝タイム

順位	500メートル	1000メートル	1500メートル	2000メートル（フィニッシュ）
1 中央大	1分33秒06	3分13秒65	4分55秒94	6分32秒36
2 早稲田大	1分33秒15	3分14秒64	4分55秒69	6分37秒84
3 仙台大	1分37秒42	3分19秒67	5分03秒55	6分43秒18
4 明治大	1分40秒49	3分22秒53	5分06秒39	6分43秒70

（日本ボート協会ホームページから）

状況を的確に見極め、漕手に指示を出す星逸人選手▶